地産地消・循環型のカフェテリア実現に向けて

—ストローベイルづくりのワークショップから—

大岩剛一
（カフェテリア建設運営委員会座長・デザイン科教授）

昨年の3月29日と30日、大津市仰木の里山の一画で、当大学カフェテリア自力建設に向けた建材制作の第一弾、ストローベイルづくりのワークショップを行った。

ストローベイル（straw-bale）とは、稲藁をベイラー（圧縮梱包機）で圧縮し、直方体のブロックにしたもの。19世紀の後半、森林の少ない北米ネブラスカ州に移住した入植者が、不足する材木の代わりに最も身近な素材である干草や麦藁を利用して家の壁に利用したのが始まりだ。毎年確実に入手でき、そもそも廃棄という概念からは無縁な藁。そんな低エネルギー・循環型の素材を利用して建築をつくることができ、しかも有害な化学物質を出すことなく、使用する建材の大部分が大地に還元される。加えて優れた断熱性、吸湿性と遮音性。藁の上から最後に土を塗って仕上げるストローベイル・ハウスが、資源効率に優れた持続可能（サステイナブル）な建築である所以である。

参加者は二日間で延べ19人、当大学の芸術計画クラスと住環境デザインクラスの学生たちである。彼らは有機無農薬コーヒーと手作りのクッキーを持ち寄って、ベイラーの持ち主である栗東の榮農場主・中井榮夫氏とそのスタッフの皆さんとの交流会も実現した。材料の稲藁は、その前年の秋に仰木の農家の協力で収穫されたもので、芯グクリや、今ではほとんど見かけなくなったハサガケ等の伝統的な方法で自然乾燥された。

このワークショップで製造した550個のストローベイルは、外壁ではなく、厨房とトイレを囲む間仕切り壁として利用される。一方建築本体の構造用木材は、信楽森林組合の協力で入手することになった間伐材だ。一年間に日本の住宅が使用する木材の量は1億m^3以上と言われる。これに対し、日本の山林は十分な木材の供給が可能であるにもかかわらず、コスト面を理由に需要の8割近くを海外からの輸入に頼っているという。私たちの当たり前の家づくりが、熱帯雨林や北米の針葉樹林を始めとする、地球規模での環境破壊に直結している。今後、国産材による家づくりはさらに大きな意味をもつはずだ。

地域の木材と稲藁、土、瓦、ヨシ。予定される地域の食材ともども、カフェテリアを構成する素材の大部分が、琵琶湖とそこに注ぐ無数の河川、里山とを結ぶ、壮大な水の循環系によって育まれたものである。めざすものはその土地で生まれ、その土地で使いこなされていく建築、すなわち地産地消・循環型のカフェテリアである。

カフェテリアに使う稲藁は、地域に伝わる「芯ぐくり」によって自然乾燥させた（仰木の棚田にて／2002年秋）

稲藁の束をベイラー（圧縮梱包記）に入れて550個のストローベイルをつくった学生たち（仰木の棚田にて／2003年3月）

第12回ヨシ刈りボランティア

開催日：2003年2月11日
会場：滋賀県蒲生郡安土町西ノ湖
主催：葭留（代表：竹田勝博氏）
参加：住環境デザイン群1年生

立神まさ子（デザイン科住環境デザイン群TA）

2月11日、琵琶湖の内湖である西ノ湖で、竹田勝博さん主催の第12回ヨシ刈りボランティアに住環境デザイン群1年生で参加した。このボランティア参加も今年で6回目となり、本群では毎年の恒例行事となった。6年前、大津市の紹介で竹田さんと知り合ったことから、制作の素材にヨシの提供を申し出ていただき、そのお礼にとして、ささやかながら、ボランティアへ参加させていただいたことが始まりである。以来、課外活動も含め、1年生の後期実習（「基礎造形実習2」）で「ヨシの造形」というグループ制作課題に取り組み、制作終了後、毎年２月に行われるヨシ刈りボランティアに参加するということが一つの形式になっている。「ヨシの造形」は、数年にわたりヨシ素材の可能性を探求してきたことで、造形表現もいくつかの手法が確立されてきたように思う。一つの素材と長くつきあうことにより、どのように表現すれば素材をより生かした造形に創りあげることができるか、制作を重ねるごとに表現や技法がとぎすまされ、作品の完成度も高くなってきた。ヨシの制作は思った以上に時間のかかるもので、容易に造形できる素材ではない。スケッチ、エスキースを重ね、模型で造形・デザイン・構造的な確認を何度も重ねて、実制作に入る。このような確認作業を行っていても、ヨシで作業をしていくなかで様々な変更が必要となる。模型から割り出した比率を正確に拡大しても、何かが違うことに気がつく。正にここで素材と向き合うのである。イメージとして完成されたものを、一分の一の世界に投じる難しさに直面する。制作を終え、半年間向き合った素材が存在した生の場所、この葭原に立った学生たちは、自分たちが何を表現するべきであったかを再度確認できるのではないだろうか。澄みきった空気と風のなか、野鳥の鳴き声とヨシのそよぐ音間に、色とりどりの作業着を着た学生たちの元気な声が響いていた。

第12回ヨシ刈りボランティア

第12回ヨシ刈りボランティア

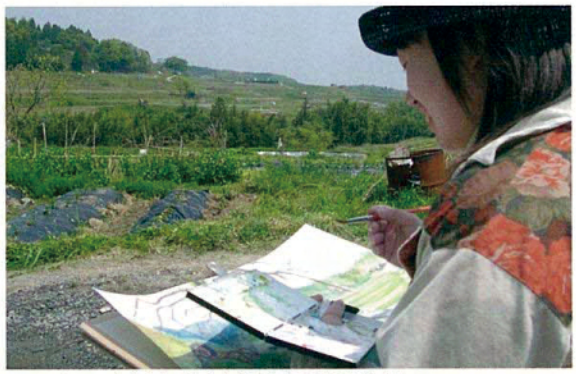
ワークショップ「画家井上直久氏と春の棚田を描く」

開催日：2003年4月27日～4月29日
会場：大津市仰木棚田桜周辺
主催：芸術文化交流センター
講師：井上直久

井上直久（デザイン科教授）

昨年の里山ワークショップで実施した写生会の好評を受けての企画です。棚田に水が入り田植えが始まるまでの四月下旬を選び、屋外での風景写生を実施しました。広報については本学の、京都大阪からアクセスの良い所在地や、風景写生にも力を入れていること、美しい景色がすぐそばにあり、地域と大学とが結びついていること、などを知ってほしいと考え、ハガキやインターネットなどで、高校生や美大受験予備校の受験生のほか、一般参加者向けにも告知しました。募集数は、個人指導ができ、現地へバスで運べる人数から50名を定員としました。京都、大阪など近隣府県からの一般参加希望者に、京都成安高校の生徒たちと顧問の先生、そして一部本学の学生（イラストレーションクラスは対象外）も加わって定員を超え、当日になって写真撮影や見学希望の来訪者もありました。

初日は、棚田周辺を散策する上での注意事項を大学で説明した後、バスで現地に移動。眺めが良く目印となる「棚田桜」の下に集合し、このあたりの見所を紹介したあと、各自が絵になる風景を求めて制作開始。写生のコツとして「およその構図を、30分でひととおり塗ってしまう」方法を今日の講師井上が実演。始めると熱心にのぞき込む人の輪ができ、近くで農作業中の地元の人も手を止めてその光景を見るという場面もありました。昼食後、講師は参加者の間をまわり、絵や制作方法について各参加者と話しました。高校生から画塾の先生、公募展に常時出品されている人など、参加者は実に多様だったことがわかりました。一日の締めくくりとして、各自棚田桜の下にできあがった作品を並べての講評会。それぞれの作品へのアドバイスに全員が熱心に耳を傾けていました。終了後には、おみやげとして井上より棚田を描いた自作のポストカードを配布。翌28日、祝日の29日は自由参加として、続けて描きに来る人もあり、講師もともに制作し、好天に恵まれて3日間が終了しました。



ワークショップ「画家　井上直久氏と春の棚田を描く」

ワークショップ「画家　井上直久氏と春の棚田を描く」

平成14年度成安造形大学特別研究助成による研究報告

近江における農耕儀礼の民俗学的研究
―とくに湖南・湖西地域の山の神行事を中心として―

木村至宏 KIMURA Yoshihiro
人間学講座 教授（民俗学・歴史学）

上記の研究に関し、平成15年（2003年）3月、研究報告書を刊行したので、その詳細を報告する。
研究代表者：木村至宏
研究協力者：和田光生（大津市歴史博物館学芸員）

報告書目次

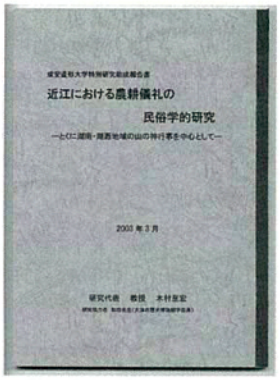
第1章　山の神論の現在
第1節　山の神田の神交替説の問題
―柳田国男の固有信仰論をめぐって―
第2節　肥後和男と京都帝国大学民俗談話会
第3節　肥後和男の民俗学的方法論
第4節　肥後和男の山の神論Ⅰ
第5節　肥後和男の山の神論Ⅱ
第6節　肥後和男の山の神論Ⅲ
第7節　ネリー・ナウマンの山の神論

第2章　大津市南部の山の神に関する覚書
第1節　橋本鉄男の山の神論
第2節　関啓司、その他の山の神論
第3節　大津市内南部山の神の事例
第1項　旧田上枝町の山の神行事
第2項　上田上新免の山の神
第3項　田上石居の山の神
第4項　田上・上田上における大山の神
第5項　大石淀町の山の神
第6項　大石富川納所の山の神
第7項　平津、井上・原田カブの山の神
第4節　大津市南部の山の神について
第1項　分類項目
第2項　祭日
第3項　祭場及び施設
第4項　神饌
第5項　作り物
第6項　小結

第3章　市内中部・北部の山の神の概要
第1節　南滋賀・滋賀里の山の神
第1項　肥後和男の報告
第2項　現在の滋賀里・南滋賀の山の神
第2節　市内北部の山の神
第1項　真野周辺の山の神
第3節　小結

第4章　結論―今後の課題―

研究の概要



近江は、周囲山に囲まれた山々との深い関わりのなかで、人々の営みを築いてきた。なかでも稲作の歴史を支えてきた農耕儀礼は、山と地域の生活の中で生まれた民俗行事である。

農耕儀礼のうちでとくに山の神は、本稿で対象とする大津市地域において濃厚に分布し、その行事が現在も行なわれている。山の神信仰は、もともと民俗学が専ら研究対象としてきたものである。ここでは大津市内の山の神の具体像を実地調査し、その様相を従来の研究史から分析し明らかにしようと試みた。

本調査報告書のおもな内容は、第一章山の神論の現在　柳田国男（1875～1962）の固有信仰論をめぐって、肥後和男の民俗学的方法論と山の神論、ドイツの日本研究者ネリ・ナウマンの山の神論、第二章大津市南部の山の神に関する覚書　民俗学者橋本鉄男の山の神論、関啓司の山の神論、市内南部の八ヵ所の山の神の分類・祭場および施設・神饌・作り物などの調査報告と考証、第三章大津市中部・北部の山の神の概要、第二章と同様に三ヵ所の山の神の調査報告と考証、第四章結論　今後の課題といった構成となっている。

民俗学の成果の一つとして、かつて柳田国男が山の神田の神の交替という仮説を唱えたが、これは山の神にかかわらず年中行事に深く関わる論であった。そして、大津市内の山の神行事は、祭礼形式も一様でなく地域性、歴史性要因などで多様であることの実態も明らかになった。山の神は考え方として農耕に必須の水との深い関係もある。本論では山の神祭礼と水との諸相として考えるならば「年頭行事」と位置付けることができる。しかし、近年かつての農耕儀礼に根ざした山の神行事いわゆる祈りが行なわれる一方で、山が過剰な伐採などで荒れ、自然との共生の観点から今日的問題も含んでいる。

なお今回の研究および報告書作成にあたっては、日本民俗学研究者の和田光生氏（大津市歴史博物館学芸員）に負うところ大きい。ここに改めて感謝を申しあげたい。